

家庭—保育所—幼稚園

幼児の教育



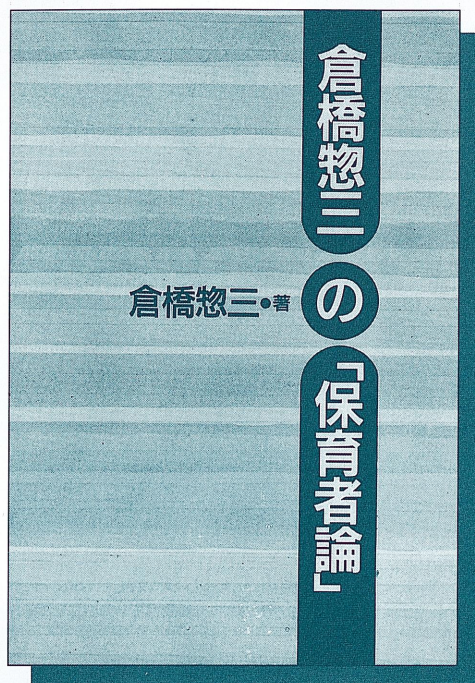
'9911



倉橋惣三の「保育者論」

発売中

好評既刊本！



倉橋惣三●著

倉橋惣三が折にふれ書きとめた

「幼児の教育者」「保母諸君と語る」「教師論」からなる保育者論。

倉橋は保育者に何を望み、どんなことを期待していたのか。

これから保育者を目指す人、今の保育に行きづまっている人、明日の保育を
よりよいものにしたいと考えている

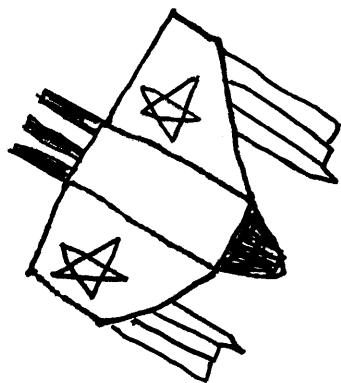
幼児教育関係者におすすめしたい必読の一冊です。

B 6 変型判 200頁 定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第98巻 第11号



幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十八卷 第十一号 —

© 1999
日本幼稚園協会

巻頭言

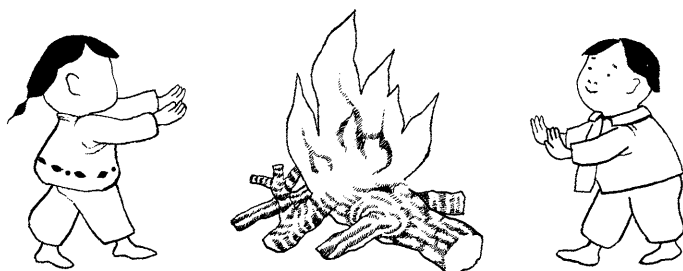
自由保育は学級崩壊の元凶か 秋山 和夫... (4)

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(1)

性をこえ世代をこえて子育てにかかわる 金田 利子... (7)

震災後の子どもたち(23) 子どもが子どもを育てる 森末 哲朗... (16)

「児童の世紀」を振り返る—その十六— 本田 和子... (22)



私が幼児教育を志した頃(1) 津守 真 (30)

子どものいる暮らしー男・夫・父 子どもは体にいいらしい 田中 泰行 (38)

子育ての探究 その四

絵画資料からみた平安時代の庶民の親子像 柴崎 正行 (44)

Qくんの「こわい」でいっぱい 尾形 節子 (51)

幼稚園の中の未就園児クラス たんぽぽ組 大沢 啓子 (58)

表紙絵／北村 俊道

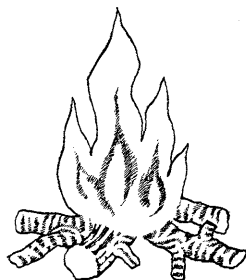
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「燃える心」

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子



巻頭言

自由保育は学級崩壊の元凶か

秋山 和夫



小学校における学級崩壊が深刻な問題になってきている。学級崩壊というのは、子どもが教師の指導に従わず勝手に席を立って歩き回ったり、奇声を発したり、騒いだりして授業にならない状態をいう。この学級崩壊が起きた理由は単純ではなく、決定的な原因の提示は難しい。多くの論者がさまざまな仮説を提示している。

その中に「学級崩壊は自由保育が一因」というものもある。要するに、幼稚園や保育所の自由保育によつて育てられた幼児が小学校に進学した場合に、集団の規律に従うことができず、勝手気ままな行動をとるようになるという考え方である。こうした考え方は、小・中学校の教師の間にも皆無ではない。「具体的な活動や体験を通して」学習

を行う小学校の生活科を学習してきた中学生は落着きのない子が多く、教室がざわつき、学校のルールが守られにくい。こうした生活態度の面で、生活科以前の中学生と比して、大きな差が見られると公言する中学校教師も少なくない。

生活科は、主体的、自発的な活動を大切にする幼稚園教育と、教育方法、教育内容面で深い関係を持つている。幼・小一貫をすすめるためのステップとして生活科は成立したのである。

このため、幼稚園の自由保育と生活科は同罪であると考え、小・中学校教師の存在を見逃すことはできない。

幼稚園の自由保育が学級崩壊の一因であるという指摘を一笑に付すわけにはいかない。その理由は次の二つの点にある。

その第一は、幼児期に形成された人間の行動様式や習慣は、以後の人生に大きな影響を及ぼすという考え方である。幼児期は人間形成にとって極めて重

要な時期であり、人間は教育されることによって始めて人間としての生活様式を身につけることを考えれば、幼児期にどのような行動様式、生活態度を形成していくかということは、真剣に考えなければならぬ問題である。

第二は、幼稚園・保育所において自由保育の考え方が正しく理解され実践されているかについての問いかけであるとも考えられる。

「幼児の主体的な活動」「幼児の自発的活動としての遊び」「幼児一人一人の特性」といった語句が正しく理解されて実践されているかどうかといった観点から、幼稚園の実践を点検する必要がある。

かつて、幼稚園では教師の役割は「指導」ではなくて「援助」でなくてはならないとか、「環境を通しての指導」が大切であるといった考え方の中で、教師が幼児に指示や命令を与えることは良くないことであるとか、教師は後に退いて幼児の活動を見守ることの大切さが強調された。

たしかに、これらの考え方自体は誤りではない。しかし「自主的な活動」や「主体的な活動」が放任になったり「幼児一人一人の特性」の尊重が子どものわがままや身勝手を許容することになっていないかどうかの点検も必要なことである。

「一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させる」ことを大切にすることは当然のことであるが、グループの活動や学級全体での活動の中における個々の幼児の興味・関心の持ちようとの関係をどう考えていくのかといった点についての十分な検討も必要である。

「指導が始まって座らない児童に担任が再三注意をしても聞きません。『やだもん、だつて座りたくないんだもん』。親に連絡したら『うちの子はいすが嫌いなんです。そのままにしておいて下さい。』」（『朝日新聞』一九九九年五月十日「読者の投書から」）

このような実態に対して、教師はどう判断し、ど

う対処していくかということが大切である。これを一人一人の興味・関心の特徴として許容すべきと考えるのか、人間としての行動様式や生活態度の未熟さと考えていくかということである。

人間は学習によってのみ人間らしくなると言われる。歩行、コトバ、排便の様式などに代表されるように、幼児期に身につけておかなばならない能力や態度は少なくない。

幼児に自由を保障してやることは大切なことである。しかし、無条件の自由というものはあり得ない。大相撲名古屋場所が終わったばかりであるが、力士は土俵という限定された場の中で、創意工夫をこらして自由に立ち回り相撲をとる。何を限定し、何を自由に行動させるかということを保育の場で考えてみるのも、自由保育のあり方を豊かにしていくための切り口ではないか。

（山陽学園大学）

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(1)

―近代化の行き詰まりを切り開く子育ての共同―

性をこえ世代をこえて子育てにかかわる

金田 利子

国際高齢者年と子育て「支援」

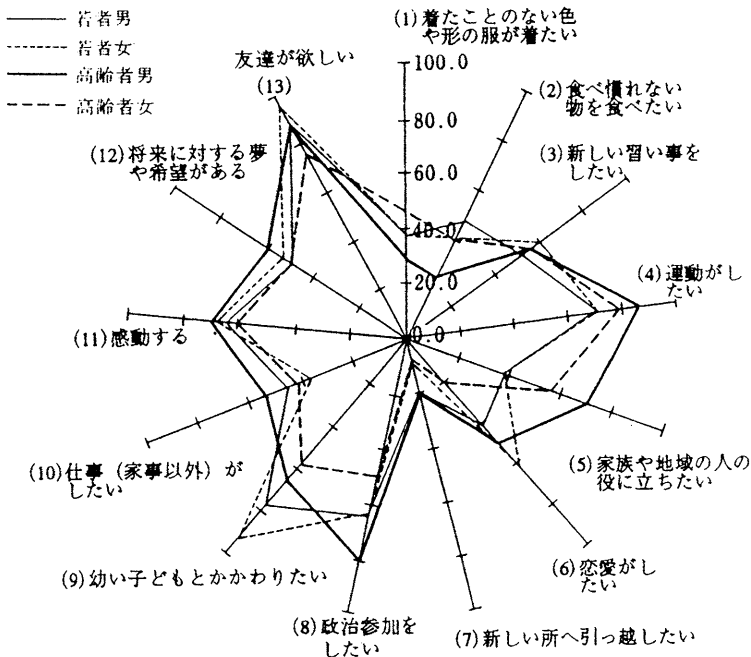
今年、国際高齢者年である。この、テーマは、「すべての世代のための社会をめざして」(Towards a society for all ages)とされている。この理念は、「子どもからお年寄りまで、すべての世代が理解し合い、

助け合う」社会をめざすものである。⁽¹⁾

すべての世代が、いきいきと人間らしく、過ごせる社会でなければ、小手先の支援を積み重ねても、子どもを生み育て子どもとともに在る生活を切り開こうとする人は増えてこないであろう。自殺者が一年に三万人以上出るような社会状況があるとき、子どもを生み

育てたいという親一般の意欲も減退するであろうことは十分に予想のつくことだからである。そういう意味で、国際高齢者年はすべての世代が人間らしく生きられることを願う年であり、子育て「支援」を考える上でもきわめてかわりが深い。

「子育て支援」といっても、社会効用論的な立場から、すなわち将来の労働力不足を憂える立場からの少子化対策としての「支援」と、親双方(父母)と子どもはもちろん、老若男女の別をこえて地域住民個々人



これは、(1)から(13)の要求項目に関する設問に対して、「まだ〇歳なので～したい,したくない」、「もう〇歳なので～したい,したくない」、「いくつになっても～したい,したくない」という6つの選択肢のうち肯定的回答の率をグラフにしたものである。

▲図1 高齢者と若者の「もし老人ならば」の意識比較

出典：初出；金田利夫「高齢者の人格発達と生活保障」坂本重雄・山脇貞司編著『高齢者生活保障の法と政策』p.369 多賀出版 1993年

の、人間としての全面的な発達を願う立場からの「支援」がある。ここでは、後者の立場に立ちつつ、社会のあり方が後者と一致する方向を模索していきたい。

筆者らの調査から見ると、高齢者は、若者（高校生）が推量したよりも「家族や地域の役に立ちたい」「政治に参加したい」という要求が強く、「幼い子どもとかかわりたい」は相対的に弱く、特に女性にその傾向が強い（図1）。したがって、高齢者の人間としてのさまざまな要求を実現していく方向ではなく、子育ての受皿として高齢者の手を期待するような施策では、明らかに彼らの意向を無視しているといえる。

年齢や性別をこえて、その人にふさわしい社会参加の可能性を追求していくことが課題になる。

「男女共同参画社会」における子育て「支援」

政府は、遅ればせながら、二十一世紀を「男女共同参画社会」と、音頭を取っている。⁽²⁾労働力政策から

もこの方向が不可欠になっていているものと思われる

る。

そしてまた、まだ、男女共同であり、平等とは言っていないところに問題はあるが、共同参画は、親・住民にとつても望むところだといえる。社会参画には政策参加を含めてさまざまな面に及ぶが、子育てと社会的労働ということを考えた場合には「共働き」があたりまえになることを前提とした施策が求められる。

それは、人間が活動を通して発達すると考えたとき、活動の質（たとえば、社会的労働と家事・育児）によつて内面に育つものが異なるからである。その結果、体験する活動に偏りがあれば、育つものも偏り、人間としての発達の幅が狭くなってくるからである。

個人が好きで狭い方を選んだのなら、それはそれでよいとの意見もあろう。筆者は、この稿の最後に述べるように歴史的展望から見てもそうは思わない。しかし、一步譲つてみても、選択したくても、選ぶ選択肢がない状況では、人間的な自由がない。男女共同（平等）参画社会とは少なくとも、さまざまな選択が可能

な社会のことだと考えたい。

男も女も、子育てにも、社会的生産活動にも、参画したいと要求する、あるいはそうせざるをえない人がそうできる社会が、男女共同参画社会の最低限の要件ではないだろうか。そして、そのように選択可能という点から捉えれば、大方の願うところと一致する。

しかし、そのような状況には、現状はまだまだ至っていない。エンゼルプランが作成され、子育て支援が大きく叫ばれているにもかかわらず、保育所に入所したくても叶わない待機児童が約六万人⁽³⁾いるという。

また、母親が預けて働くことに対する、罪悪感を母親に抱かせてしまう社会的風潮も、まだまだ潜在しているだけに、男女共同参画社会への方向に、いっそうブレーキがかかってしまう。この神話の浸透を払拭していくことも課題となる。

子育ての責任は誰にあるか―親と国との関係―

このことを、国連・子どもの権利条約から考えてみ

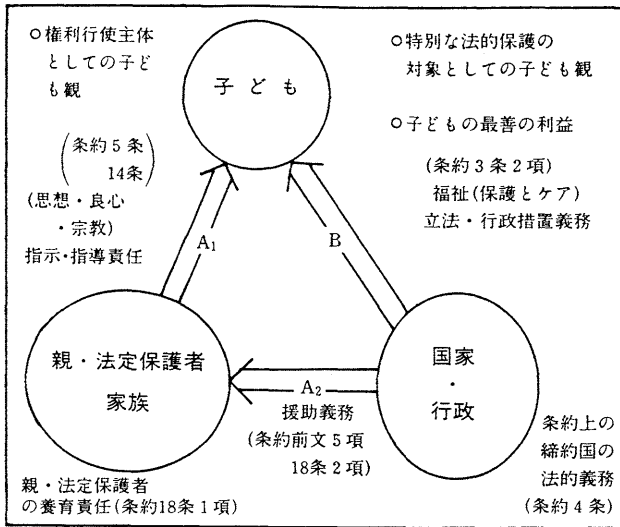
よう。周知のように条約十八条では、端的に言うところのようになっている。「子どもの養育と発達にとって、身近な第一次的責任者は親双方（父母）である」と規定し、国には親双方がその義務を果たせるように援助する義務があり、働く両親を持つ子どもには、質のよい保育施設を用意すべき」だと。

では、国にあるのは親への、援助義務だけかといえ、そうではない。三条（子どもの最善の利益）の二項においては、「児童の父母、法定保護者又は児童について法的に責任を有する他の者の権利および義務を考慮に入れて、児童の福祉に必要な保護および養護を確保することを約束し、このため、すべての適当な立法上及び行政上の措置をとる」とあり、父母等の権利・義務を考慮しつつも、国家が児童の保護と養護を確保する上での国家の立法・行政措置義務が明記されている。

この関係を喜多明氏は図2のように示している。

このように親の権利・義務と国家との関係をとらえ

◀図2 条約における子ども・親・国家の法的関係
 出典 喜多明人『新時代の子どもの権利』P. 86 エイデル
 研究所 1990年



るとき、法律について素人の立場からであるが、保育所への希望者が約六万人も待機しているという事態は、一九七九年(養護学校義務制の制定)以前の障害児の「就学免除・猶予」の問題とその本質が重なって見えてくる。

憲法では、親がその子女を就学させる義務を明記している。重い障害を持つ子どもの親は、決して、その責任を放棄したり、義務を果たしたくないというわけではない。果たしたいのに、受け入れる学校がないので、就学義務の「免除あるいは猶予願い」を不本意ながら書かざるをえないという、矛盾した事態に出会ってきた。その結果、子どもの教育権が保障されずに在宅を余儀なくされていた。これは、「おかしい」というところから、不就学をなくす運動が発展し、ついに、どんなに重い障害をもつ子どもにも学校教育を保障しようという、制度として、養護学校の義務制が実現した。

不本意な「就学免除・猶予」と、不本意な「保育所

への待機」の問題は、どちらも「親権の保障」がされていない状況という点において共通するものがある。どちらも、義務規定に近いといわれる「親権」を行使しようとしてもできないからである。そして、その「皺寄せ」は、それぞれ学校教育への権利と保育所等での公的保育への権利が奪われ、子どもの発達保障のうえに及ぼされるからである。

前者の場合、一九七九年の養護学校義務制の制定において、内実においてはまだまだ不十分な点はあるが、親は、本意ながら「免除・猶予」願いを書くという屈辱からは解放された。後者の場合は保育所等への、義務規定はないので親の保育への免除・猶予願いを書く等ということはないが、子どもの権利条約十八条の3が保障されていないため、保育所入所ができない間、保育所に替わるところを探したり、保育の中心は大丈夫かと心配したりとその負担が親に集中してくる。にもかかわらず、先の「神話」の浸透も手伝って、「それでも働き続けるの？」などと、育児放棄あ

るいは育児に熱心でない親のように思われるというように、ストレスが二重にかぶさってきている。

子育て「支援」の質に関する課題は、次回に取り上げるが、まず量的な面から、このような事態が克服されてこそ、真の保育元年と言えるのではないだろうか。

子育て「支援」における地域住民の位置と役割

「子育ては親だけではできない。社会全体で担うものだ」とよく言われる。自治体によってはその自治体独自のエンゼルプランにおいても、子育て「支援」とは使わずに子育て「ネットワーク」と使っているところもある。では、社会全体とは具体的に誰を指すのだろうか。また、ネットワークに組み込まれるそれぞれの個人や団体は、どのように位置付くであろうか。

子どもが、現在の大人たちの発展的後継者として次代を担う主体になっていくことは、社会の側からの期待であると同時に、個人の全面発達の側面からいっても、不可欠なことである。

そういう意味で、子どもは、「地球市民」であると同時にその所属する社会の一員である。子どもには、敏感な感情を内に持ち個性のある一人の人格として自分のことを全体的に理解してくれて、その人権の代弁者として、後に立って支える存在が不可欠である。その役目を担うのが、親あるいは法定保護者になる。その親等の権利（親権）の委託を受けて一般的な能力と学力に責任を持つのが学校教育など、公的で集団的な教育・保育であろう。

この両面が保障されたとき、子どもが守り育てられる。したがって、親等の親権者の意向を無視して、国が介入することは許されないし、親も我が子だからといって、自分の思い通りにのみしてはならない。

では、地域における、ある子の親ではないが他の子の親である住民にとって子育て支援はどのように位置付くであろうか。先の図でいけば、子どもを持つ親・住民にとってはそれぞれが「親」に位置付き、親権を共同で行使しようとする親集団となる。

すでに、子どもが自活し子育てを一応は終わっている住民や子どものいない住民はどうか。親ではなくても、広い意味の親集団のなかに位置づくのではないかと考える。親集団の一員として子育てに参加し、子どもの育てやすい、ひいては人々が人間らしく暮らしやすい環境をつくっていく方向に、その中には地域住民としての専門家も含まれているであろうが、いずれの場合にも、自身のできるところで参加することになることが望まれるからである。

保育所や幼稚園および多様化してきているさまざまな子育てにかかわる公務労働等はどうであろうか。さきの喜多氏の図2にはその点が明記されていないが、あえて位置づければ、A2にあたる。こうした公務労働に携わる人たちが、親・住民の立場に立って、親・住民が共同ですすめている相互扶助的活動と、どう結合して、親・住民の発達に寄与する仕事をしていけるかが課題となる。親と子と住民の発達に寄与する仕事は、企業の利潤追求の視点ではなく、親・住民の協業

労働と公務労働の結合でいけるようにさせていく不断の取り組みが必要になるであろう。

言い換えれば、単なるネットワークではなく、親・住民とその立場に立って働く人たちが連帯して子育ての共同をつくりあげていくことが求められる。

近代化の行き詰まり⁽⁴⁾を切り開く子育ての共同

十八世紀末の産業革命以来、二世紀あまりにわたって世界は工業中心に発展し、合理的に効率的に動き、また、人間生活の諸活動が、経済価値を生み出す社会的生産的活動Ⅱ「公」、再生産的活動Ⅲ「私」とに分割された。そして、労働は主として家族の外で行われるようになり、再生産活動を主とした生活集団の呼称として「家庭」という概念も生み出された。同時に男は「公」の領域を、女は「私」の領域を主として担当するという性別役割分業が当然のようになっていった。そしてそのことが、いかにもそれぞれの「性」に向いた「天職」かのように、普及され、産業革命以後

近代化の流れの

中で、生み出さ

れた、ある種の

心理学もこの流

れの根拠として活用されてきた。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

日本でも明治以来、こうした、近代化がすすめられ公私の分化が男女の分化となり、給料の標準や税制など、あらゆる社会システムが、専業主婦が家にいることが前提とされるようにもなり、実態は変化している⁽⁷⁾にもかかわらず、このシステムは今日までつづいている。しかし、二十世紀も最後半になり、かなり様相が変わり、このことの矛盾が露呈してきた。女性が子どもを以前より生まなくなつたのも、大きく見れば、こうした近代化への抵抗だと考えられる。

さらに、「二十一世紀は共働きが当然になる社会に」と述べたのは、このことを意味する。

したがって、子育て「支援」は単なる支援ではなく、また、単に親が楽になればいいのでもない。今



日、親のみならず、それぞれが当事者意識をもって子育ての共同に参加することが、男女の分業思想や、高齢者や障害者を排除し、人間を効率主義で見る「早く、たくさん、巧みに」という、近代的合理思想を切り返し、プロセスを大切にし、老若男女が年齢や性を超えて個性を発揮しつつ、あらゆる活動に参加している人間中心の社会をめざす二十一世紀への展望につながるのではないかと考える。この意味で、子育ては社会全体の課題だといえる。

こうした視点から、次回は子育て「支援」の質的側面について、幾つかの具体的取組をとりあげて考察したい。

(静岡大学)

引用・参考文献

(1) 松村祥子「国際高齢者年と日本の課題」『女性労働研究No

36」四一九頁 一九九九年七月

(2) 「男女共同参画社会基本法」一九九九年六月二三日公布

『官報号外第一一八号 一九九九年六月二三日』七頁

(3) 資料・「一九九八年一〇月一日現在待機児数 厚生省児童

家庭局保育課調べ一五万八千四百五十七人」『保育情報』

保育研究所、一九九九年八月号 二六、二七頁

(4) 佐藤和夫他「近代」を問いなおす』大月書店 一九九四

年

(5) 上野千鶴子『資本制と家父長制』岩波書店 一九九〇年

三一五頁

(6) 柏木恵子・高橋恵子編著『発達心理学とフェミニズム』ミ

ネルヴァ書房 一九九五年 一一五二頁

(7) 大沢真理氏講演 一九九九年七月九日 於静岡大学人文学

部「ジェンダー視角でみる日本経済開発の帰結」の資料

(夫がサラリーマン、妻が専業主婦の世帯はほぼ三割)に

よる。この資料は『経済企画庁平成七年版国民生活白書』

により作成されている。なお参考文献としては、大沢真理

『企業中心社会を超えて』時事通信社 一九九三年があ

る。

震災後の子どもたち (23)

子どもが子どもを育てる

森末 哲朗

五月十六日（金） よう子

「おかあさん」

わたしのおかあさん、どうしてるのかな。

おかあさん、どこにいるのかな。

わたしはそんなことわかんない。

ときどきおかあさんにでんわをしてるけど

さびしいな。

ときどきわたしは、さびしくてさびしくて

ないちゃうときがある。

いつも、いつもさびしい。

おかあさんはげん気にいてほしい。

ああさびしいな。

草の表面に丸まっていた水滴がポロリとこぼれ落ちるように、日記の中からよう子の呟きが聴こえてきた。二年生になったばかりのよう子の両親は、半年ほど前に別れて暮らすことになった。よう子と、彼女の二つ違いの弟は、父とその両親と一緒に生活している。

男手ひとつで、保育所通いをしている息子と、小学一年生の娘。よう子を育てることは無理と判断し、よう子の父は彼の両親に同居生活を求めた。

よう子にとつてのおじいちゃんとおばあちゃん、それに父と弟との五人家族が、突然にスタートしたのだ。幼いながらも、父の苦勞が見えるだけに、「この生活に順応しなくては」と、気が張っていたことだろう。でも、やはり、母が恋しい。そんな想いが日記の中に溢れている。

学校では何か言われると嫌だから、両親の離婚のことについては、一人二人の友だちを除いては誰にも話していないと言うよう子。

ところがこの日記の中では、ありのままの心を裸にして曝けている。どんぐりクラブでの日記は、「日記活動」のような性格を持っていて、互いを知り合うためのオープンな日記なのだ。これだと思う日記に出会ったら、翌日ばくが皆の前で読む。よう子もそのことを承知で、この日の日記を書いたのだ。仲間への信頼が無ければ、到底できないことだ。

翌土曜日は行事があったので、日記の時間はとれず、月曜日になってよう子の日記を紹介した。自分の悲しみを伝えたくて書いた日記でもあるので、ぼくが声を出して読んでいる間、よう子は少し嬉しそうだった。いくつかの日記の中には、笑いを誘うものもあったが、よう子の日記の時には水をうったように静かだったことを覚えている。

よう子はこの日もまた母のことを書いた。

五月十九日（月） よう子

あああ、みんなはいいな。

おかあさんがいいいな。

わたしのうちもいてほしいな。

あああ、いいな、いいな、いいな。

よう子は自分のことだけで頭がいっぱいだったのだらう。

六年生のけいすけは、一年生の夏に、母を病気で亡くしている。

五年生のまさひろは、二年生の終わりに両親の離婚を経験し、いまは母と暮らしている。

本当は「みんなはいいな」ではないのだ。

よう子のさびしさを深く深く理解できる仲間が、とても身近なところにいるのだ。

「誰がよう子の気持ちに伝えてやってくれるだろう？」そんな思いで月曜日に書かれた日記を一冊一冊手にとった。

「誰もいなかったらどうしよう？」そんな不安が全く無かった訳ではないが、やはりちゃんとした。け

いすけだった。

五月十九日(月) けいすけ

「いまだここに」

いまだここにおるんやろな、おれのお母さん。

電話かけたいけど電話番号わからへん。

あー本まにどこにおるんやろか。

いまもあのことが本気に思えへん、思ったくない。

いまは明るく生きるだけや。



少し照れ屋のけいすけだが、心の熱さが彼を沈黙させなかった。当然彼にだって、触れられたくないこと触れたくないことはあるだろうが、重かったであろう心の扉を開いて亡くした母のことに触れていた。

自分一人が寂しさの海で漂流していた気でいたよう子は、「そうや、けいちゃんもそうやったんや!」と、思い直すことができた。

この日のよう子は、次のような日記を書いた。

五月二〇日（火） よう子

けいすけくん、かわいそうだな。

わたしのおかあさんのこえならきけるけど、けいすけくんのおかあさんはしんでいるから、こえもはなせないなんてかわいそう。

わたしよりも、けいすけくんのほうが、かわいそうだな。

でも、マーくんのおとうさんはどうしてる

かな。

わたしはそんなことはわかんないな。

でもわたしだけじゃなくて、マーくんやけいすけくんもかわいそう。

よう子はとても大切なことを発見した。

わたしだけじゃない、ということ。

普段、何気なく喋ったり遊んだりしているけいすが、「わたしよりも」大きな悲しみを隠し持っていたことに気がつき、目が醒めた。

よう子の心の動きを、十分な手応えをもって見定めたけいすけは、更によう子に熱い球を投げ返した。

五月二〇日（火） けいすけ

「よう子へ」

おれとよう子は同じような気持ちやろうけど、「いいな」というのは9/10あつとって、

1／10 まちがっとうかもわからへん。

オレが思うにはお母さんおらんお母さんおらんってかなしんだり、た人をええなと思っ
とったってなんもできん。

かなしいなかなしいなあってへこたれとって
もあかん。

かなしいな、でもがんばらなと思わなあか
ん。

思っとうだけじゃあかん。

自分でけっしんしなあかん。

さいわいよう子はええかおしてるけど、心
はずたずたやろうと思う。

それで1／10というのは、9／10かなしま
なあかんけど、1／10げんきだしてがんばろ
うと思わなあかん。

そうせな、いつまでたったって、「かなし
いな」というぬまにはまったままやったらあ
かん。

1／10のげんきをだして、自分の進む道を
すすまなあかで。

重い扉を開いたけいすけの翌日の日記は、まるで
エンジンを全開にしたような激しさと同時に優しさが
溢れていた。

今度はよう子が、けいすけの投げた球をしつかり
と受けとめた。

五月二十一日（水） よう子

わたしのいえは2回だてでもおかあさんが
いない。

いえがおおきいよりおかあさんがいないほ
うがいやだ。

だけどわたしはげんき。

でも心はたのしいこととおかあさんのこと
だけだ。

でもがんばらないとだめだなとおもう。

だつてがんばらなかつたら、ずうつとずうつとかなしむとおもう。

わたしはがんばるぞ。

心はたのしいことをいっぱいにして、おかあさんのことはちよつとだけにしておこう。

これからは、がんばるぞ、ファイトだ。

たった一週間にも満たないが、熱い時間が流れた。バトルと言つてもいい。二人は力いっぱい直球を投げ合つた。そして見事にけいすけはよう子を立ち直らせてしまつた。

ただでさえ短い放課後の中で、鉛筆を握りしめる時間が負担だつた子もいた筈だ。外でもっと遊びたいな、と思つた子もいただろう。

でも誰一人として「エーッ、今日も日記すんのオ」と、いやそうな声をだす子はいなかつた。

よう子にとつて、けいすけからの剛速球の返球が、どれほど大きな励ましになつたか測り知れない

が、他の皆んなが自分の方を向いてくれたということも、彼女にとつては嬉しい贈り物だつたに違いない。

連続した毎日を、一年生から六年生までの異年齢の群れの中で過ごすことの良さを、ぼくはあるごとに語つてはいるが、よう子の心の流れを見つめ合つたこの熱い一週間のことを忘れることはできない。

誤解が生まれないために付け加えるが、毎日がこんなにうるわしさに包まれている訳ではない。実に他愛もないことで言い争つたり、張り合つたり、ウソをついたり、子どもの百面相は実に奥が深い。

でも、子ども自身が最良の「教育者」であることも確かなのだ。

（六甲学童保育所どんぐりクラブ）

「児童の世紀」を振り返る

—その十六—

本田 和子



「栄養過剰」と増殖する「肥満児」

—育児観変容の指標として—

前回に述べたように、今世紀は、新しく登場した「栄養」という概念が子どもたちを取り巻き、それが「育児」の成否を決する重要なキーワードとして従事する人たちを脅かしさえした時代であった。頻発する「赤ちゃんコンクール」や「健康優良児」の表彰は、

この動きを証しする端的な例と言えよう。結果として、乳児死亡率が激減し、子どもたちの体位が向上したことは疑うべくもない。第二次大戦後の子どもたちも、彼らの成長が「栄養」との結合において考えられがゆえに、餓死や栄養失調による大量死から免れることが出来、何とか戦後の食糧危機を乗り越えることが出来たのだった。

そして、ほどなく、丸々と肥った赤ん坊や豊かに伸びた子どもたちの手足は、朝鮮戦争による特需景気を経て、敗戦の疲弊から脱出したわが国の立ち直りを証しするかに見え始める。これら子どもたちの身体に体现されたのは、敗戦国のわが国が、飢餓の恐怖から漸く脱し、戦争を放棄した平和な社会で、豊かな暮らしを志向することへの許可証であつたかも知れない。

以後、荒廃した農業生産も軌道に乗り、隣国の戦火に益された結果とは言え、工業生産力も回復して、国民生活は上昇気流に乗り始める。国民の栄養摂取量が、増加の一途を辿り、それに伴って子どもたちの生活も充実路線をひた走ることになる。それに、戦後の混乱期に跳梁した伝染病も逼塞に向かつて、子どもたちの成長を阻む障害は、急速にその影を薄くしつつあるかに見えた。

ところで、「保健衛生」あるいは「栄養」などという見地から見たとき、子どもたちの前途には何の災いもなく見えた一九六〇年ころから、新たな問題が生じて

育児者たちを脅かし始める。それは、「乳児の肥り過ぎ」であつた。完璧なまでに調整された人工乳は、子どもたちをまるまると肥らせてくれる。体重計の目盛りは、日々、面白いほどの上昇を示して、育児に当たる母親を喜ばせる。彼女らにとつて、もしかしたら、標準を上回る体重の増加こそが、自身の育児の成功を物語る指標と見えたのではなかつたろうか。

一九六〇年に乳児保育に当たつたのは、概して、戦後の教育改革期に中学・高校の生活を体験した女性たちであつた。男女は平等・同権であり、両者の間に差はない筈と教えられながら、女性の大学進学率はいまだ数パーセントに過ぎない。両性の間に横たわるこの明らかな学歴差は、女性に対して、家庭こそが彼女たちの職場であり、子育てこそが女性の最良の職務であるとする性別分業観が、微動だもせずその強さを誇示していたことを物語っている。したがって、家庭に追いやられた女性たちにとって、子育ては、自身の生きがいを掛けて成否を競う「負けられないゲーム」と

化し始めていたのではなかったか。

戦前に端緒を見せる「赤ちゃんコンクール」は、それを体制側が用意することで、女性たちの育児意識を覚醒させることに機能した。しかし、いま、母親たちは、「わが子を育てる」という極めて個人的な営みを、自ら他者間の競争路線に乗せるという社会的な意味合いを付与することで、家庭内に閉じられた営みから解き放つことを企てる。このとき、体重計に刻まれた目盛りの変化は、競争の行方を占う格好の指標であつたろう。何しろ、それは、「数値」という客観的な表現で示されるのだから、ごまかしようもなく、その勝敗を決定してくれるではないか。

米国で、心理学者ゲゼルの著書がよく読まれたのは、母親たちがその発達研究を、自身の育児効果判定の指標に用いたからだと言われている。研究者自身の意図は別として何ヶ月に何が出来るといふその発達の様相は、自分の子どもの発達と平均値とのずれを判定すべく、格好のバロメーターと見なされたのである

う。そして、米国の母親たちも、

客観的基準であるかに見える発達研究を目安にして、自身の子育てを他者のそれと競い合った。わが子が、他家の子どもにまして早くよく成長しているとき、彼女らの生きがいはいち満たされたのであろうし、逆の場合は、敗北感の焦りに捕らえられて、常にまして過剰なエネルギーが子育てに注がれたことだろう。

こうして、新しい生き方の可能性を示唆されながら、現実には家庭内にしか居場所を与えられなかった女性たちが、子育て競争に突入するのは珍しい例ではないが、わが国の場合は、戦後の貧しさへの反動のように、それが「栄養競争」の形で開始されたため、「肥満乳児」を多発させる結果を招き寄せたのだ。そして、数年後には、小学生の肥満児童が増加して、多すぎる体重を持て余して動作も鈍く体力的にも劣る小学生の存在が、注目を集めることになった。子



どもの「体重」が、看過し得ぬ問題として社会的視野に浮上したことは、平和で豊かな時代の贅沢な遺産に他ならない。それが社会的注目を浴び、負の話題として云々され始めたとは、加速度的に訪れた豊饒の季節に大人たちが戸惑い、その行く手に漠然とした不安を感じ始めた証しと言えるかも知れない。

インスタント食品と食生活の変容

肥満児の増加が注目され、調整粉乳やら給食用添加食パンやらと、子ども向けに行き渡り過ぎた栄養主義が裏目に出たかに見え始めたころ、皮肉なことに、子どもの食生活は歯車を逆に回すかのように貧しさへ向かい始めていた。朝食抜きで登校する子どもや、夕食もインスタントラーメンを一人で食べたなどという子どもが増え始めたのである。

一九五三年にはインスタントスープが発売され、五八年には、最初のインスタントラーメンが店頭に出ている。続いて、インスタントコーヒーやティーバッグ

など、インスタント食品の開発が進んで、六二年には、インスタント離乳食品が市場に出回り始めた。世はまさにインスタント食品時代に突入したのである。一九七一年のカップヌードルは、その極めつきの姿と言えよう。

近代型家族の解体を加速化させたのは、インスタント食品の登場だったなどというなら、それは、あまりにもおかげさに過ぎるだろうか。しかし、煮たり焼いたりという調理の手間を大幅に軽減したこれら食品の出現は、社会進出を志向する女性たちにとっては、紛れも無い福音であった。一日の労働を終え、くたびれて帰宅したその手足で、慌ただしく食事の支度をせねばならない彼女たちの前に、それは、救いの神として立ち現れたものではなかったか。とりわけ、空腹を訴えて聞き分けのない子どもたちに対して、単なる「おやつ」ではなく、「食事めいたもの」としてあてがうには、インスタントラーメンなど、まさしく格好の素材だったことだろう。こうして、インスタント食品は、

急成長を遂げた。

インスタント食品の進出は、単に、働く女性たちを喜ばせただけではなかった。この時代、専業主婦と呼ばれる女性たちまでが、家族の食事のために心を砕くことを喜びと感じられなくなり始めていた。総務庁統計局が行った食料費に関する調査資料によれば、一九六〇年代から八〇年代にかけて、調理食品と外食の伸び率が異常に高い。この結果が物語るのは、家庭の女性たちが、材料から手間暇かけて調理することを厭い、簡便で短時間に処理可能な半調理品やインスタント食品を愛好し始めたという動きであろう。

インスタント食品の手軽さを愛したのは、台所の主たる女性たちだけではなかった。子どもたちも、愛好者の意志を表明する。何しろ、ほんの一寸の加熱や熱湯を注ぐだけで、各自が、好きな時、好きな場所で空腹を満たすことが出来るのだから、受験戦争やおいしごとくに忙殺され始めていた子どもたちの慌ただしい生活リズム内に、しっかりと位置を占めたのは当然と

言うべきだろう。インスタント食

品を嫌ったのは、女性の居場所が家庭と特定し、妻の整える食事に「おふくろの味」とやらを求める夫だけだったのかも知れない。

その結果として、子どもたち

が、家族全員で食卓を囲むという食事のありように煩わしさを感じたり、不要感を抱いたりし始めたとしても、無理からぬことではないか。「夕食までに帰宅すること」というしつけが意味を失い、同時に、一日の内で家族が顔を揃える時間の特定が困難になったのも、このころからであった。一九九〇年代に行われた「子どもの本音を聞く」という報道番組のための調査で、「頭髮や服装に関する校則への疑義」と並んで、「なぜ、家族と一緒に食事をしなければならぬか」という疑念が多く出されているが、その発端は、インスタント食品が登場するこの時期に求められるかも知れない。



子どもたちが、常にインスタント食品を口にしていくというのではないが、その出現により、家人が心をこめ時間をかけた調理品が食卓にならび、家族揃ってそれを賞味するという、これまで「食事」の持っていた基本概念とそれに託されてきた団欒イメージとが、失速し希薄化し始めたことは確かであろう。インスタント食品の、それこそインスタントな性格が、その解体に手を貸すべく、一役も二役も買ったであろうということだ。ほどなく、一人で食事する子どもの問題、とりわけ、誰もいない食卓で孤独にラーメンをすすめる小中学生の姿が話題になり始める。

流通革命のもたらしたもの

—スーパーマーケット、コンビニエンスストア—

の出現と子どもたち—

スーパーマーケットやコンビニエンスストアの出現が、「子ども」を変え、母子の関係を変え、延いては「家族のありよう」までも変えたというなら、それ

は牽強付会に過ぎるだろうか。

スーパーマーケットの開店が続き、流通機構と消費者の購入形態に大幅な変化が起こるのは、およそ一九五八年ごろからである。以前とは異なり、店頭に並べられた商品は、指定された価格をレジで支払う能力さえあれば、誰にでもどんな時でも、自由に購入出来ることになったのだった。子どもと言っても、例外ではない。それに、数量の計算も店員との交渉も不要のこの買ひ方は、むしろ、子どもの客にとってより相応しかったとも言え得よう。何しろ、彼らは、スーパーの普及に伴い、自由に使える若干の金銭を所有してさえいれば、誰の干渉も受けず、陳列棚の上から好みのものを選び取り手に入れるすべを獲得したのだから。とりわけ、スーパー商品の主流を占めた食料品と、子どもたちの強い結び付きには、目を見張るものがある。というのは、従来は、調理食品の選択は、ほぼ母親その他の家人の手に任せられていたのだが、スーパー中心の購入形態のなかでは、親たちと一緒に店内

を歩き回ること、子どもたちも選択の権利を獲得してしまつたのだつた。一望のもとに並べられた食品類に対しては、子どもでも好みのものを指さして要求することが出来たし、さらには、手を伸ばしてカゴの中にはより込むことさえ可能となつたのである。

以後、子どもは、商品戦略の有力なターゲットとして注目されざるを得ない。スーパーに並べられる新製品は、子ども向けCM戦略を駆使して彼らの購買欲に訴えて売上を伸ばした。それでなくとも、好奇心の強い子どもたちは、五三年以降放映の始まつた民放テレビで、CMの電波に乗って広く国内を駆け巡る新製品にすかさず触手を伸ばした。家庭の味覚や地域の伝統食にまして、CMが全国に流した新食品の味が子どもの世界を支配する。インスタントラーメンや即席カレー、あるいは、チョコレートなどの菓子類や粉末ジュース・氷菓等、スーパー店頭で売り上げ高を誇つたものには、「対子ども戦線」で勝利を収めたものが少なくない。そして、六四年ころからこの戦列に参入

し、見事な戦果を誇つたのが、スナック菓子であつた。

コンビニエンスストア、通称コンビニの普及は、この傾向に拍車をかける。多種類の食品類が、少量ずつ狭い陳列棚に隙間もなく

並べられ、終日営業の店舗形式は、子どもたちの視界に、その猥雑さと親しみやすさで特別の位置を占めたのではなかつたらうか。もしかしたら、それは、漸く姿を消しつつあつた「駄菓子や」の生まれ代わりとして、子どもたちと親しい関係を結んだのかも知れない。とりわけ、コンビニに並べられたおでんやホットドック、あるいは弁当類の多様さは、しばしば「母親代わり」の便利さで中高生を魅了したし、極言すれば「母親不要」の新時代を到来させるきっかけを作つたとすら言えよう。

加えて、自動販売機の普及により、自動販売機のジュース売り上げが急増した。一九五八年に日本上陸



を果たしたコカ・コーラが、アメリカ軍関係者専用という特殊な地位を捨てて、広く人々の暮らしに親しいものになったのは、自販機の普及に負うところが大きい。言うまでもなく、子どもたちも自販機の愛好者となる。そして、肥満児を生み出す元凶とされた「糖類の過剰摂取」は、ジュース類の多量飲用に責任があると指摘されるほどに、自販機効果は絶大であった。

さて、子どもたちが、スーパーやコンビニという新流通形態をフル活用して自身の食欲と空腹を満たすことを覚えるのと前後して、彼らの生活は、補修授業や塾通い等の受験勉強で忙殺され始めていく。放課後を、ゆつくりと家で過ごしたり、おやつテーブルを囲んで母親と今日あったことを話し合ったりという、それまでの暮らしのパターンが彼らから失われる。そして、インスタントに入手可能なインスタントな食べ物への好みと、この慌ただしい生活スタイルとが奇妙にマッチし、さらに父親の忙しさもそれを促進するのだが、先にも触れたように、子どもらの周辺から、

「夕餉の食卓を囲んで一家団欒する」という家族風景が急速に過去のものとなっていった。

結果として、子どもたちは、夕食に関心を抱こうとはしなくなる。時間前に口に入れた軽食やジュース類で一応の飢えは満たされていたし、家族の誰彼の欠けた遅目の夕飯には、格別の興味も湧かなくなっていたのである。八二年に、メディアは、家族がバラバラに食事することを「孤食化傾向」と命名して話題とした。孤食化に適合し、それを推進したインスタント食品とスーパーやコンビニの普及は、まさに「食事すること」が、家族の営みから個人の行動へと変容し、「食習慣」が「団欒」から「孤独」へと推移していった時代の象徴でもあった。

(聖学院大学)

私が幼児教育を志した頃(1)

津 守 真

私は青年期に敗戦という日本の社会の大転換期に遭遇し、戦前と戦中と戦後といずれもの時期を体験した。つい最近までは、これは私共の世代の者はだれでもが知っていた共通体験だったが、いまはその時代の人が少なくなつた。過去は知らない方がいいこともある。しかしその記憶を失つたら現在が違ってしまうような大事な記憶もある。私はその時に青年期を生きた者としてそれを記しておきたい。私が幼児教育を専門とするに至つたの

も、自分の青年期の日本の敗戦の体験と切り離すことはできない。

私は昭和十八年から日記を書いていた。それを手掛かりにして記してみようと思う。

復員の日

昭和二十年八月二十九日、私は一面焼け野原の道を駅から家に向かつて歩いてゐた。途中、夾竹桃の赤い花が



強烈だった。私は毎年夾竹桃の花が咲くとき、昭和二十年のあの日を思い出す。家の勝手口をあけて、「ただいま」と声をかけると、母と妹が飛び出してきた。母は顔をくしゃくしゃにして床に座り込んだ。いまは亡き母の最も印象的な顔である。私は埃にまみれたゲートルをゆつくりとほどきながら、もう二度と兵隊にとられることはないのだと自分に言い聞かせた。

私が召集されたのは、わずか一月半前の七月十四日だった。私は西田幾多郎の『善の研究』を読んでいた。私の肩越しに母が召集令状を机の上において、「今朝召集の報を受けたから記念に一筆書いておこう。現実の一つ一つが人生の階段である。一步一步登って

行こう。純粹経験に徹して」と私は日記帳に記して、本を閉じた。一度軍隊に行けば、生きて帰れないというのは、当時の青年はだれもが知っていた。送る人も送られる人も、みんなが悲壮感を負いながら、毎日を何とか明るく生きようとしていた。

昭和二十年―軍隊と敗戦

私は昭和二十年四月に文学部心理学科に入学した。戦争の熾烈な時で、三月九日には東京は上空襲に会い、本所深川、下町一帯が焼かれ、何万という人が死んだ。五月二十五日の大空襲では山の手一帯が焼かれた。低空飛行で焼夷弾をバラバラと落とす米軍の爆撃機の腹を、私は映画でもみるようにすぐ目の上に見ていた。その焼夷弾を消そうと走り回って私も軽い火傷をした。一カ所消しても、次から次へと落ちて来る火の玉には、もはやなすすべもなく焼かれるに任せるよりほかなかった。私共の住居は幸いに焼け残った。

入隊の日、駅のホームの端に立っていつまでも手を振っていた父の姿を私はいまも忘れることができない。

私にはいつも背筋を伸ばして励ましてくれた父だったが、このときの父の姿には別れ難い気持ちが滲んでいた。背中の荷物の中には、父がくれた小さな聖書と、万葉集とクルト・レヴィンの心理学の本を入れていて、そのことで入隊早々にひどく殴られた。軍隊は、上官の命令を笠に着て、下士官が自分勝手に振る舞う下等な集団である。自己反省もなく、他人への配慮も尊敬もない。母が買ってくれた、何本も刃の出る上等なナイフがいつものまにか下士官の腰にぶら下がっていた。それを知りながら、私は何も言うことができなかった。崩壊寸前の日本陸軍の実態を私はつぶさに体験していた。兵隊とはいえ、帯剣もなく、食器は空き缶と竹の筒だった。私の部隊は房総半島南端の千倉に送られた。海岸線の砂浜に、人ひとりが入れる「たこつば」防空壕を掘り、竹の棒の先に爆薬をつけて上陸する米軍のタンクの下に飛び込む

のが私共の任務だった。あるとき大隊長が馬に乗って視察に来て、元気があつてよろしいと私はほめられた。こんな状況で、こんなことでいい気分になるのも人間心理の不思議である。竹の先にくくりつけた手榴弾でタンクを爆破できると思えなかったし、こちらも爆弾と一緒に死ぬのだが、だれもそのことは質問しなかった。

私共が敗戦を知ったのは八月十八日だった。町にいった兵隊が、米軍のまいたビラを拾って来て、日本は負けたりしいと知らせた。次いで、杉山元帥の率いる第一軍は、奸臣の言に迷わされず徹底抗戦すべしとの軍命令が出た。私共大学生の兵隊は、二・二六事件と同じ反乱軍になるのではないかと本気に逃走を考えた。日本は戦争に負けたから、兵隊は皆奴隷としてどこかにつれてゆかれる、兵たちはまだ家に帰れると思うなど、下士官は私共に言った。次いで占領軍命令で、定められた期日まで日本軍は鴨川以北に撤退しなければ射殺するとのことだった。私共は銃の菊のご紋章を石で摩り消し、部隊の



銃をすべて校庭に積み上げ、油をかけて焼いた。八月二十三日の夕方、私共は部隊の荷物を竹の棒にくくりつけて担ぎ、房総半島を北に向かって行軍を開始した。二晩三日寝ずに歩いた。天津、小湊、勝浦と、沿道には漁師や農民が、大日本帝国陸軍の見取めだと提灯をもつて見送ってくれた。袖の下に握り飯をもつていて、将校を見ると隠し、私共兵隊に走り寄ってくれるのである。いま思うと、歴史の貴重な瞬間に立ち会ったのである。大原の民家に数日宿営したが、その間にも、家に帰りたい兵隊が逃走し、汽車の屋根に乗ってトンネルで振り落とされて死んだとか、噂がとびかった。八月二十九日、私は突然汽車に乗せられて家に帰

ることになった。いま思えば、私は最も早くに復員したことになる。

昭和二十年秋の日本

召集直前に読んでいた『善の研究』を私は長い間開く気が起こらなかった。再び家にいる不思議さ、その間の世の中の変わりように、啞然として何日も過こした。蟬が絶え間無く鳴いていた。暑い夏だった。

八月三十一日には、マッカーサー元帥が厚木飛行場に着陸したことが新聞に報じられた。九月二日にはミズリー艦上で降伏調印式が行われた。九月五日の帝国議会開院式の勅語には平和国家という言葉があった。私が小学校に入学以来、何十度も聞き暗唱していた「朕思うに我が皇祖玄宗……」とは全く違っていた。先日図書館で当時の新聞を見たところ、「朕は……」ではじまる詔勅は次のように述べられていた。「……平和国家を確立して人類の文化に寄与せんことを冀い、日夜軫念おかず、

此の大業を成就せんと欲せば、冷静沈着、隠忍自重、外は盟約を守り、和親を厚くし……」。どの一語もあの頃しばしば目にした語である。

九月六日には東久邇宮が首相になり、新聞は「万邦共榮、文化日本を再建設」という大見出しを掲げた。半月前までは「大東亜共榮圈、徹底抗戰」という語に満ちていた同じ新聞である。さらに首相談話として「前線も銃後も、軍も官も民も、国民尽く静かに反省する所がなければならぬ。今こそ総懺悔し……」と掲げた。「前線」とは、大陸や南方への最前線の兵隊、軍人であり、銃後とは、前線の兵隊が安心して戦争できるように、国内にあつて家や職場を守る婦女子である。現在ではこんな注をつけないと理解されない語であるが、当時にあつては、この語を使わなければ国民の実態をあらわせなかつた。軍、官、民によつて人口は構成されていた中で、いまや「軍」は解体されつつあつた。軍隊の階級を示す肩章を切り取つた軍服姿が町に溢れ、上官に出会つても

はや直立不動敬礼する者もない、社会の変化は急激だつた。「国民総懺悔」というのは、当時の標語だつた。

八月十五日以来、一カ月も経たないうちに、軍国主義指導者のみでなく、国民全部が日本の犯したあやまちを反省して懺悔せねばならぬと国の指導者が宣言した。戦時中に正論を言つたためにひどい目にあつた先輩達がいふた。言うべきときに言わなかつたことがあるではないかと言われれば、だれもが後ろめたく感じていた。国民総懺悔というなら、そのことだろうと青年は考えた。言うべきときに発言しなければ全体が取り返しをつかない方向に進む。このことは後年になるまで折にふれて私は思い起こした。後に私は米國に留学したときに、國際政治専攻の米國大学生の友人は、日本人は國民総懺悔と言うが、今回の戦争の何をだれが反省し、懺悔するのかと皮肉を込めて批判した。総懺悔というのは、だれも本氣に理性をもつて反省していいことではないか、時がくると、また全員が逆行するというのが彼の趣旨だつた。現



代に思い当たることばである。

九月九日の新聞は、連合軍が極めて平穩のうちに帝都に進駐したことを伝えた。九月十四日の新聞は、第一軍司令官の杉山元帥の自刃、夫人も後を追って自刃されたことを伝えた。私の部隊の最高司令官の自殺である。私の軍隊生活は名実ともに終わった。

社会の大変転の中でも青年は自分が将来に向かって何をなすかを考える。

昭和二十年九月九日の私の日記には、「自分は何かをなすことを望んでいる。そして何もできないでいる。望んでいるのは、心理学であり、生理学であるかもしれない。しかし、最初から理想的な学問や理論が存在しているのではないだろう。自分の生活の中から

学問を生み出さねばならない」と記した。戦争指導者の自決は、このころ毎日のように報じられた。軍人、政治家のみでなく、その中には、私が読んでいた『生理学』の著者であり、元文部大臣だった橋田邦彦の服毒自決もあった。これらの人々は時代の逆転に遭遇し、壮年期の精神的アイデンティティを保つには、それ以外の道が考えられなかったのだろう。価値の逆転した社会に生きて自分はどうすればよいのか、若い人は皆、迷っていたと思う。

柿の木に夕日があたっていた。蟬の声がじんと沁みいるようだった。

新聞は、「誠意溢れる米軍の態度」を報道した。軍隊といえば、上官の命令に服従して人間性を殺す日本軍の實際を常に体験して来た私共にとって、遠慮なく人間性を見せる米国の軍隊は驚きだった。あの当時の人々には、日本の軍隊と連合軍の軍隊とのコントラストは新鮮に映ったことは間違いないだろう。

この頃、友人たちは次々と軍隊から復員して来た。私の亡兄は昭和十七年九月に当時の臨時措置による大学短縮卒業とともに、六本木の近衛歩兵三聯隊（現在の防衛庁）に入隊した。私は兄の背広を風呂敷に包んで持ち帰った。じきにスマトラに行ったが、最後まで将校にならず、兵長のままだった。音信がなくなって久しかったが、母は、玄関の扉があくたびに飛び出していった。その兄は敗戦のときイギリス軍の捕虜になってシンガポールで港の荷役に従事し、二年半後の昭和二十二年半ばに復員した。帰ってきたのは幸いだったが、青年時代の六年間、軍隊にいつていたことになる。私の親しい友人の中には、遂に帰らなかった人が何人もいる。私の父のいとこのKさんは、私の家に寄宿しており、私の隣室で寝起きしていた。私より二年年長で、商業高校に通っており、悩み多き青年だった。私をはじめてフロイトという名前を見たのは彼の本箱だった。その他、式場隆三郎、赤面恐怖症、性と名のつく本が並んでいた。よく私の部

屋に来て悩みを語った。兵隊にゆくことを忌み嫌っていた彼にも、昭和十九年に召集令状がきた。縄をつけられて引つ張られるようにして出征した。比島に行つたと聞いたが、遂に帰らなかった。悩み多き多感な彼は、死に際して「海ゆかば」も「君が代」も歌わなかったに違いない。もうひとりの親しい友、旧制高校で同じ文乙の仲間だったMくんは、哲学青年だった。しばしば夜中に彼は寮の私の部屋に訪ねてきて、哲学宗教を語った。兵隊にゆくことを嫌がつて泣いていた。彼は母親思いだった。入隊直前に彼が作詞した寮歌の結詞で、彼は、「追憶（おもいで）は尽きず湧きくれ、しのびよる別れのしらべ、継ぎゆかん若き友らに、護りきし伝統（つたえ）の灯（ともし）」とうたつた。彼もまた帰つて来なかった。シベリアで死んだと聞く。私の同級生は戦死した者は比較的少ないが、私と一、二年違いの上級生たちは、たくさんの方が南方や大陸で戦死した。中には無実の罪を負つて、外地で戦犯として処刑された若者もいる。こ



の友らの死は何だったのだろうか。暈の上の死ではない。軍隊と戦争の時代の荒波に翻弄されて人生を終わつたこの友らのことを、私はいまもしばしば考える。

大学はまだ再開されていなかった。

昭和二十年秋、軍隊から解放されながら、青年はそれぞれに悩んでいたと思う。後になって聞いたのだが、法学専攻のある友人は、価値観の転換に悩んだ末、基督教徒となり、ユダヤ教律法の研究者になった。生物学専攻のある先輩は仏教文化の研究者になった。陸士や海兵に行っていた友人たちは一般大学に再入学せねばならなかった。皆それぞれに自分の道を探していた秋だったのだと思う。

*

この原稿を書いているとき、「君が代」の法制化が国会で決められようとしている。

私の世代にとって、「君が代」は、これらの無念の思いを抱いて戦死した若き友らの記憶と結び付いている。国家にとって国歌があるのは当たり前ではないかと言って強制するのは何かがおかしい。昭和二十年秋だったら、こんなことは起こらなかつたらう。軍隊の体験は一樣ではなく、軍隊という階級制度の中で尊敬されて良い思いをした人もいる。その人達にとっては、「君が代」は自らの人生の栄光の時期の頌歌なのかもしれない。私は外国に行つて国歌が流れると皆が起立して敬意を表するのは礼儀だと思う。しかし日本人の戦争の記憶には複雑なものがある。「君が代」を批判すると、また「非国民」と言われるのではないかという心配をするのは、私の世代の思い過ごしであらうか。

子どもものいる暮らし―男・夫・父

子どもは体にいいらしい

田中 泰行

あいさつ療法のすすめ

子どもが体にいいからといって生野菜がいいとか、ドクダミが高血圧に効くというような話ではないので、くれぐれも子どもにかぶりついたり、煎じて飲んだりしないで欲しい。子ども

と暮らしているかどうかというわけか元気が出てくるようだという話である。念のため。

幼稚園の職場に入ってから数年してからあるきっかけが元で、毎朝園の正門で登園してくる園児や保護者と挨拶を続けているが、これを始めて気がついたのは挨拶をしているうちに気分がよ

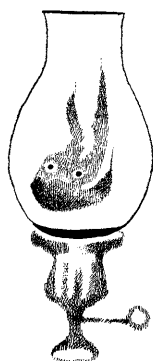
なくなっていくことであつた。登園時間の約三十分、次々と登園してくる子どもや保護者（殆どが母親）と一人一人挨拶を交わしているうちに不思議なほど気分が晴れてくるのである。ちよつとした悩み、むしろくしゃ、いらいらなどは体内から湯気になって蒸発していくのがはつきり分かるような気がする。と書くところ「大袈裟な！」と舌打ちする人がいるでしょう。絶対いるんだ、そういう人。疑うなら、一度やってごらんなさい。ゼーったい効くって。仕事上の悩み、人間関係、失恋、夫婦ゲンカ、家庭争議、訴訟その他なんにでもいいみたい。ある時保護者会で調子に乗って、朝の挨拶は二日酔いにも効くんですなどと吹聴したために大いに顰蹙を買ってしまった（でも本当に効くんだよ。大きな声では言えないけど）。でもこの話をするに「子どもより若いお母さん達が効

くんじゃないですかあ？」なんていう奴がいる。冗談のつもりかも知れないが馬鹿だねえ。人を見てものを言えよ、人を見て。

自分の子どもはさらに効く

正門での挨拶を始めた頃と前後して長女が生まれた。初めて子どもを持つて思ったのはこいつのために体を大事にして頑張らなくちゃということ。考えてみればこれほど体にいいことはないよね。本人がそう思い込むんだから。ウーム、赤ん坊の力おそろふべし。

しかしとても体に悪いこともあつた。ある休





日の昼下がり。退屈なのでスヤスヤ眠っている赤ん坊の手や足をつついたりして遊んでいたのが、ふと思ひ立って、その手のひらをそっと開いてみた時には愕然としたね。体中総毛立つというか目の前が真つ暗になるというか。生命線がないのである。もしや初めて授かったこの子の余命はいくばくも……。ショックでしたよ。しかししばし茫然自失の後、父親はすくつと立ち上がるや猛然と本屋へ走ったね。手にとるはもちろん手相の本だ。食い入るように熟読しました。立ち読みで。結果は床にくずおれるほどの安堵感であった。赤ん坊には手相ができていないんですって（お陰様で長女は人一倍健康人間に育ってくれてます）。しかしあれは体によくなかった。特に心臓や血圧には大変よくなかった。

やがて一年半後に次女が生まれたが、これが

またとびきりの孝行娘であった。なにしろ幼児期よりぜんそく持ちで、そのため父親はそれまで一日三、四十本吸っていた煙草をすっぱりとやめることができたのだ。親孝行物語としてもこれ以上のものは考えられない。恩人といっても過言ではないであろう。完全禁煙から早や十六年、お陰で父の肺は今やすっかり赤子の如きみずみずしさ。ニコチンの汚れなど微塵も見当たらない新鮮さである。次女はその後小学校時代まで時々発作を起こし痛々しい思いをさせられたが、その後発作はすっかり影をひそめ、これまた今や元氣過ぎて手を焼いている。

その後三女、四女と相次いで生まれて来てくれたため父親はその度に「がんばらなくっちゃ」「体を大事にしなくっちゃ」と決意を新たにさせてもらった。お陰で、嘘偽りなくいうが就職以来二十八年病欠は一日もない。あり

がとう、やはり子どもは体にいいのだ。

他にも子どものお陰で体にいいことは枚挙にいとまがない。例えば六年間で四人の子どもを授かったわが家は当然のことながら毎日が戦場である。その中で父親も時として敢然と台所に立った。四人の子ども達を健やかに育て上げるために栄養のバランスと経済と時間の節約を考慮に入れると、たどり着いたのは鍋料理であった。要するにチャンコ鍋だね。肉、魚、貝、野菜類、キノコなどたっぷり入れて、それにワカメや豆腐とくればもはや無敵だ。効果は歴然、ぜんそくやアトピーが少しずつ出たものの、チャンコで育った娘達は大きな病気をしたことが全くない。

ただし副作用も出てしまった。栄養本位主義が過ぎたらしく、娘達は鍋料理にあまり好意を持たなくなつたようだ。それと父親が食べすぎ

て太つてしまったのはちよつと体によくなかつた。いつの世もバランスというのは難しいものだ。

効き目には限界が？

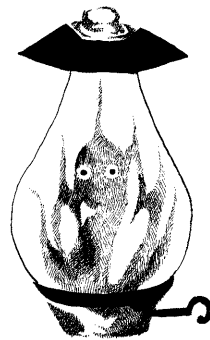
このようにめざましい子ども効果に恵まれてきた私であるが、最近になつて気になる兆候が目立ってきた。例えば座つていた姿勢から立ち上がる時、まったく意図していないにもかかわらず自然に「ドッコイショ」とか「ヨイショ」というかけ声のようなものが口をついて出てくるようになった。あまつさえ物忘れがひどくなつてきたのも打撃である。これもすべて子どもパワーが私に届きにくくなつてきたのではないか。園の正門での挨拶は今まで通り続けているので家庭内の変化が原因であるとしか考えられないのだが、やはり娘達が育ち過ぎてしま

い、私の波長とずれてしまったのに違いない。
子どもパワーには年齢制限があったのだ。さて
私はこれからいっただうしたらよいのか、正
直いつて不安感が募るのを禁じ得ない今日のこ
頃である。

子ども浴効果は存在するのだ(という気がする)

昔から自分が産んだ卵から孵化した幼虫に、
自らの体を食わせる蜘蛛がえらいとか、若葉が
出ると古い葉が落ちるユズリハが親の鑑だなん
て言われるけど、今は事情が違ってきてるよう
に思うなあ。九十歳代の親を七十歳代の子ども
が世話をする時代だよ。

「生理的未熟児」として生まれた人間は長いこ
と親の保護を必要とするって習ったけど、なに
しろ少く見積もっても義務教育終了まで十五
年、法律的にも子どもは親を生かしておかなく



てはならないわけだから、子どもは親を元気づ
けるシステムを持ち始めてるんじゃないのか
なあ？ いや持つのが生物の知恵ではないのか
なあ？

娘達が赤ん坊の頃、家の中には常にミルクや
おしめなどの匂いが漂っていた。泣き声はとも
かく、赤ん坊の機嫌がよい時に発する「アー、
ア」とか「ンク、ンク」といった柔らかな声が
聞こえていた。室内には当然のことながら幼い
子ども達のまだ清らかな呼吸器官から吐き出さ

れた空気が漂っていたが、あれにはきつと免役効果なんかがあるに違いない。それに赤ちゃんの表情、手や足の動き、そして抱き上げた全身の感触、重さ。自分を頼りきって生きようとしている、小さいけど一人の人格としての重さなんだなあ。それが親を始めとする大人達に元気を与える。：ウン、ないほうがおかしい。あかちゃんや幼児が発する健康効果成分であるんだよ。絶対あるって。

子ども嫌いの社会になってきた？

ところが最近電車やバスの中に多数の幼児を連れて乗り込んでいくとよく分かるんだけど、子ども嫌いの人間が増えているっていうのがこの十年の実感であります。特に中高年で顕著に思えるんだ。若い人の反応は前からあんまり変わらない。子どもが乗り込んで来ると「迷惑こ

の上ない」という表情をする中高年が増えた。以前からそういう人はいたけれど、その数が増えたんだと思う。逆に小さい子どもや赤ちゃんが乗ってくると目を細めて見つめている中高年が減ったんだね。罰あたりなこと。

子どもが親を元気づけて自分もまた元気に生きていこうとする天然自然のシステム。いいなあ。誰か研究していないかなあ。でもそのパワーが届かなくなってきたということは、もしかしたら「もういらないよ」ってこと？

なんだか急に冷えてきたみたい。おお寒。

(向南幼稚園)

子育ての探究 その四

絵画資料からみた平安時代の庶民の親子像

柴崎 正行

文学的資料の限界

前回の子育ての探究では、平安京の貴族階層の親子像について調べてみた。資料としては「今昔物語」や「源氏物語」さらには「枕草子」といった当時の物語や日記さらには紀行文などを検討した。そして今回も

それと同じ手法で当時の庶民の子育てについて検討を試みようとしたが、それは困難であることがわかってきた。その理由は、文字に書かれた当時の資料は、貴族階層の生活については詳しくふれてはいるものの、庶民階層の生活についてはほとんどふれていないのである。文字の書き手であり読み手でもある貴族

階層にとつて、より高貴な人々の生活には関心があつても、庶民の生活など知らないし、また知る必要もなかったのであらう。

このことは当時の社会において文字という伝達手段が、貴族階層という限られた人々によつてのみ独占されていたことを示すことにもなる。確かに当時の庶民階層は農耕や漁業中心の生活であり、人から人へと生活経験や出来事を伝えていくための伝達手段は口話を中心であり、まだ文字の読み書きを必要としなかった。そのためほとんどの庶民は読み書きができず、したがつて自分たちの子育ての様子を書き記したり、文字で物語を書き表すこともしなかった。そのために文字に書かれた当時の資料から平安時代の庶民の子育てを検討することはなかなか困難なのである。

絵画資料の有効性

こうした文字資料の限界を補うために、今回は絵画

資料を用いてみることにした。私自身は絵を観たり描いたりすることが大好きで、高専時代には美術部にも所属していたほどである。特に水彩画や水墨画を中心とした日本画が好きで、雪舟の雪景色や近年の東山魁夷の自然などを描いた作品が大好きである。そのために日本の絵画史にも興味があり、浮世絵などで子育ての様子を描いた画集などが出されると集めたりもした。

そこで今回は十二世紀末までの平安時代に描かれた絵画資料を検討することによって、そこに描かれている庶民階層の親子像を分析してみることにする。そうした観点から十二世紀までの絵画資料を探してみると（注1）、次の六点が取りあげられていた。

「源氏物語絵巻」 十二世紀

「餓鬼草紙」(二卷) 十二世紀

「信貴山縁起」(三卷) 十二世紀

「地獄草紙」(四卷) 十二世紀

「年中行事絵巻」(十六卷) 十二世紀

「伴大納言絵詞」(三卷) 十二世紀

これらの絵巻や絵詞、縁起や草紙が書かれた背景には、三つの理由が考えられる。

第一には「飢餓草紙」や「地獄草紙」のように、地獄や餓鬼の恐ろしさを絵画という視覚的手段に訴えることによって、より多くの人々に宗教心を呼び起こそうとしたこと。第二には「源氏物語」や「信貴山縁起」、「伴大納言絵詞」のように、当時の人気者であった光源氏(源氏物語)や寺社(大和信貴山)さらには応天門の変という事件(伴大納言)などを題材に取り上げて物語化して描いたこと。さらに第三には、当時の貴族の人々にとって大事なことであった宮中行事への出席の仕方やその展開の仕方などを描いて伝えようとしたことである。

このように十二世紀に描かれた絵画資料は、文字では表現しきれない恐ろしい姿さらには物語などの具体

的な様子などを幅広く含んでおり、その伝える内容には貴族の生活する姿に混じって当時の庶民の生活ぶりが付録のように描かれていた。そこで次には、これらの絵画資料に平安時代の庶民の子育てがどのように描かれているかを概観してみることにする。

「餓鬼草紙」に描かれた出産

この草紙は平安末期に描かれたものである。餓鬼道におちた餓鬼たちの凄惨な姿を迫力ある絵で描いている。その絵の中では「伺嬰兒便餓鬼」に出産の場面が詳しく表現されている(注3)。

地方の豪族らしい邸宅の産屋は、畳も含めて白一色に統一されている。産婦だけでなくお産に立ち会う数人の女性も全員白無垢である。男児が誕生したばかりの場面であり、その側で餓鬼が舌なめずりしながら今にも嬰兒を襲おうとしている。この餓鬼は前世でわが子を失い、その悲しさのあまりに夜叉に変身して、子

どもを殺そうとさまよってきたのであろうか。

この場面から、平安時代において出産はすでに産屋で行われており、男子禁制になっていたことがわかる。しかも関係者全員が白無垢に着替えて立ち会っていたこともわかる。貧しい庶民の家庭においても同じように出産していたかどうかはわからないが、豪族以上の家庭ではすでに平安時代においてこうした出産方法が行われていたのであろう。またこの時代には出産に失敗して嬰兒を失ったり、あるいは産婦も死に至ることも多かったであろう。その悔しさや無念さは、その女性を夜叉に変えてしまうこともあったかもしれない。そのくらい母のわが子を思う気持ちは強かったともいえる。そうした気持ちは現在でも強いのであるが、平安時代においても同じであったといえるのではないか。

「信貴山縁起絵巻」に描かれた子育て

この絵巻は、大和信貴山の命運に関わる奇跡的な物

語を描いたものであり、平安初期のものといわれている（注3）。その「尼僧の巻」は、信貴山の高僧である命運の姉が尼僧となって弟に会いに行く旅の行程を描いたものである。この巻には、尼僧と街道の人々との交歓風景がしばしば描かれている。

尼僧一行が奈良の街道を歩いていき、街道筋の民家に弟の所在をたずねたところ、杖をついた老夫婦が出てきて話している場面がある（注1）。この場面には老夫婦の側に授乳中の嫁が描かれており、その赤子は裸であり乳房をくわえて幸せそうに見える。またその民家の入り口では食事中だったのか着物一枚を着流した六、七歳の男児がお椀と箸を持ったままその様子を見ている。また同じく街道の民家では犬を追い払うために窓から



棒を振っている夫婦がいるが、その側に女兒がおり着物を着流している。その夫婦のうち妻は二歳位の裸の幼兒を抱いている（注2）。この巻では大和地方の農村風景を描いた場面もあるが、その中に菜を摘み取る女性が二人いる。その一人の女性は赤子をおぶって仕事をしている（注2）。このことから、当時の母親はわが子をおぶったまま、畑仕事をしていたことがわかる。

また「飛倉の巻」は、山城山崎の長者の屋敷から倉が飛んでいく話を描いたものである（注1）。その中で、空中に飛び上がった倉に人々が驚き騒ぐ場面があるが、その人々の中に驚いて倉を見上げている母親の背に裸の乳児が半纏でおぶわれて眠っている。周囲の騒ぎも気にせず安心して眠っているその姿には、母親におぶわれて眠る赤ちゃんは幸せそのものだという描き手の思いが感じられる。

「伴大納言絵詞」に描かれた子育て

この絵詞は、応天門の変（八六六年）の顛末を語る説話を絵巻物化したものである。応天門が放火され炎上した事件の容疑者として大納言の伴善男が伊豆に流されるまでの話を描いている。この絵詞は風俗的な資料としての価値も高く、院政期の子どもの姿を描いているので貴重であるという（注1）。

その中巻には、京都の町中で子どもの喧嘩が発生し、そこに父親が介入している場面がある。子どもの喧嘩に父親が口をはさみ、自分の子どもをかばって相手の子どもを蹴飛ばしている場面があるが、その姿は庶民というより下級貴族と思われる（注1）。周りの人々もその成り行きをあんまりだという苦笑いの表情で見ている。いつの時代も、わが子のことになるという周りが見えなくなる親はいるものである。

同じく中巻には、舎人夫婦が伴大納言の犯罪を暴露

しているのを、たくさん見物人が聞いている場面がある（注1）。その見物人の中に老女が孫らしい裸の赤子を服にくるんで抱いている姿がみられる。その横に母親らしき女性がいることから、孫を抱きながら娘と一緒に見物に来たのであろう。いつの時代も母親は娘の子の世話をするものである。

「年中行事絵巻」に描かれた子育て

この絵巻は平安末期に京都の年中行事を描いているが、かなりこまやかに京都の行事の風景を描いてくれている。そのため、当時の庶民の生活ぶりを理解するための貴重な資料であるともいえる。

「鬪鶏」は平安時代から流行ったもので三月三日に行うのが慣例となった。神酒と供物が供えられた朱塗りの明神の前で行われ、庶民が多く見物した様子が描かれている（注1）。その中には母親や父親に連れられた子どもたちの姿も見える。こうした行事には当時は

庶民も親子で見物に参加していたことが窺われる。

「印地打ち」は五月五日の端午の節句に、大勢の大人や子どもたちが二手に分かれて石を投げ合い、合戦の真似ごとをした行事である。こうした行事の周辺にはそれを見物している女性や子どもがよく描かれており、その中には母親におんぶされている赤子の姿もみられる（注1）。

また「毬杖」はホッケーに似た遊びで杖で毬を打って遊ぶものであるが、正月によく行われた遊びである。その遊びには大人たちに混じって遊ぶ十歳位の子どもたちの姿が描かれており（注1）、大人も子どもと共に興じた遊びであることがわかる。このように平安時代においても、庶民は親子で遊ぶことがあったようである。

平安時代の庶民の親子像

以上の絵画資料の読み取りから平安時代の庶民の親

子像にせまってみたいと思う。

まずは家族の構成員からみると、多くの絵巻において老夫婦と母子が描かれていたことから、親子三代で一つの家に同居することが多いらしいことがわかる。またいくつかの場面では夫の存在が明確ではないが、これは夫が昼間は仕事に出かけているために不在なためなのか、あるいは貴族と同じように庶民も当時は夫が通い婚であつたために昼間はいなかったのか、この資料だけではよくわからない。

次に当時の乳児の世話は母親がすることもあるし、老女（祖母）がすることもあつたが、ほとんどの場合で大人の女性が子守をしていた。またはほとんどの場合において、乳児は裸のままおぶわれたり抱かれたりしており、寒そうなときにのみ半纏のような服で包まれていた。これは幼児でも同じであり、裸でいたり着ていたとしても粗末な産着や着物を一枚だけ身につけて着流しているだけであつた。

また子どもたちは親の仕事や地域の行事に付いていつて側で見学したり、時には大人の遊びと一緒に参加するなど、大人の生活に深く入り込んでいた。そして親子の心理的な絆は強く、時にはその情念が母親を夜叉に変えるほどであつた。こうした親子の生活の在り方や心理的な絆は、貴族階層の親子像とはまったく異なるものであつた。

（東京家政大学）

注

- 1 黒田日出男「絵巻」子どもの登場―中世社会の子ども像―
―河出書房社 一九八九年
- 2 毎日新聞社 復元の日本史「説話絵巻―庶民の世界―」
毎日新聞社 一九九二年
- 3 塩川京子「描かれた女たち―絵巻の主婦像から昭和の美人画まで―」（朝日選書）朝日新聞社 一九九九年

Qくんの「じわり」でいっぱい

尾形 節子

四歳児年中組一学期

三月にお誕生日を迎えたばかりのQくんは、「もう四歳だ。大きくなったんだよ」という気持ちでいっぱいだったのかもしれない。でも、はじめての幼稚園生活は「こわい」でいっぱいだった。

Qくんは、はじめての幼稚園生活にちよつと緊張しながらも、線路をつなげて汽車を走らせたり、おままごとのおうちでごちそうを作ったり、わりと楽しそうに遊んでいるように見えた。そし

て、先生が「もうお迎えの時間ですよ」と声をかけると、「？」といった表情でやはりにこにここと笑って遊んでいた。たぶん、「幼稚園というところは帰る時間が決まっているので、その前に片づけをして、帰り支度をするようになっていいる」という生活のパターンが、Qくんには実感としてわからなかったのだと思う。だから、最初にQくんが気づいたのは、「どうやら片づけはするものらしい」「片づけをするとほめてもらえるらしい」「片づけをしない人には注意をしてもらいたい」ということだった。それは、せいぶん先生がしていることだった。もともと、それが先生の一番伝えたいと思っていたことというわけではなかったのだけれども。

最初先生は、Qくんをなんとか帰る気にさせることで精一杯だった。けれども何日かすると、「Qくんかたづけています」「Qくんいすをなら

べました」「Qくんもうすわっています」と言いながら真つ先に帰り支度をするQくんの変化に、「なんかちがうな」と思うようになった。「自分はやらなければならないことをきちんとやっています」ということを認めてもらいたいQくんの気持ちがびんびん伝わってきて、先生はちょっと困った。だって、先生の伝えたいことは「きれいになって気持ちいいね」だったから。まあ理想をいえば、だけれど。

ところでQくんは手が早い。ちょっと「違う」と思うと、あつという間に手がでる。たとえば、誰かが使っているものを貸してほしい時、Qくんは「かして」と聞いてみるのだが、相手が「いや」と言う、と、間髪入れずにボカッ。『かして』と言ったら、貸してあげないといけないのに貸さないから」というのが、Qくんの言い分。「使っているから貸せないということもある。相談して

みないことには何ともいえないなあ」というのが先生の考え。二人の思いはズレている。そこでまず先生は、Qくんがかつとなる前に、Qくんのしたいことやほしいものを「ほらこっちでもできるわよ」「同じのここにもあるのよ」と提案していくことにした。とっさに思いつかない時には、とりあえず間に入って「どうかした？」と声をかけるようにした。それでも間に合わず、Qくんにぶ

たれたりひつかかれたりして泣く子は多かったけれど、その仲裁にかなりの時間を割いた。Qくんが、入園したばかりの幼稚園で、「乱暴な子」「いやな子」というレッテルを貼られないように、Qくんのしたいことやほしかったものを周りの子どもたちにも伝え、Qくん自身をわかってもらえるよう最大限努力しているつもりだった。だから、ある朝Qくんのお母さんに「Qくんが幼稚園を『こわい』と言っている」と言われた時には心底

驚いてしまった。「どちらかといえば、まわりの子どもの方がこわい目にはあっているのに」という感じだったから。

けれど、とりあえず「こわい」つもりになって見ることにした。しばらくすると、「こわい」はQくんについて考える時のキーワードになった。「こわい」からおうちのトイレ以外では用をたせないQくん。

「こわい」から、幼稚園で着替えができない（たとえば、汚れた靴下を脱げない）Qくん。

「こわい」から、まわりの子どもとぶつかってしまふQくん。

とにかく「こわい」から、自分を守ることで精一杯なQくんなのだろ



四歳児年中組二期

夏休みあけの九月、Qくんは元気に登園していた。Qくんのお母さんは、「今年の夏はようやく外でもトイレに行かれるようになり、やっと遠出ができました。（今までは、家のトイレに帰れる範囲の時間しか外出ができなかった。幼稚園では、一度失敗してしまった以外は家につくまで我慢して、トイレに行かなかった。もともと排泄の間隔が長い方だったらしい）」と嬉しそうに報告してくれた。幼稚園でも先生と一緒にトイレに行かれるようになり、着替えも一人でできるようになっていた。ゆつくりとではあるが、ひとつひとつの生活習慣を自分のものになっているQくんの様子が実感され、お母さんも先生も嬉しく思っていた。

しかし、九月も終わりに近づいた頃、Qくんの

お母さんから「『幼稚園では、お弁当を全部食べなくてはいけなのがいやだ』と言って、お弁当のある日は幼稚園に行くのを朝しぶるんです」と言われ、またまた先生はびっくりした。だって先生は、Qくんに一度もそんなことを言ったことはなかったし、『『食べたい』』と思って食事をするのが一番大事』だと思っていたから。でも、確かに先生は、全部食べた子のお弁当箱を見て「きれいに食べたわねえ！」とほめたり、「おなかがいっぱいになっちゃったから残したい」という子に「そっか、じゃあしかたないよね」と言ったりしていたから、「お弁当は残さず食べるもの」というのが一番に伝わってしまうのも仕方なかったのかもしれない。とにかく、『『食べたい』』と思って食事をするところから始めたい』と考えていることを伝えた。そして、『『まずは本人の食べたい分だけ食べればいい』』ということをわかりやすくQ

くんに伝えていこう」ということだった。

Qくんは、お弁当を食べなくなった。正確に言うと、幼稚園では食べなくなった。つまり、家に帰るとすぐにお弁当を食べるようになった。なんだか、トイレと同じような感じである。

四歳児年中組三学期

相変わらず、Qくんはお弁当を食べなかった。

しかし、最初の頃はとまどった子どもたちやお母さんや先生も、この頃になると「まあ、そういうこともある」と思うようになっていた。

お弁当を食べないQくんと一緒にお弁当を食べるという一風変わった食事風景もごく自然な様子になっていった。「Qくんきょうもおべんとうたべないのか」「Qくんはおながすくのじかんがかかるんだよ」「Qくんは、おうちでたべるのがすきなんだよ」という会話が、Qくんもまじえて

かわされる。最初の頃の「このこと聞いていいのかな?」「聞かれたらどうしよう……」というな

んとも言い難い緊張感はすでになくなっていった。

「箸が上手に使えないからお弁当が食べられないのではないですか」「食べるのが遅いのがいやなのではないですか」とQくんがお弁当を食べられない理由を必死に探していたお母さんも、「家では、『おいしい』『おかあさんといっしょにたべたい』とか言って食べるんですよ。もう何というか……」と笑って話せるようになっていた。

先生は、お弁当の時間のQくんの楽しそうな話しぶりを見て、「子ども同士で仲良く会話が進むこと（いざこざにならないこと）がQくんにとっではとても嬉しいことなんだ」と思うようになっていた。幼稚園で収穫したミカンやお誕生会のおやつなどはあつという間に平らげてしまうQくん

の様子も、先生を安心させた。「幼稚園で緊張のあまり食べ物のどを通らない、ということではないらしい」と思えたので。

五歳児年長組 一学期

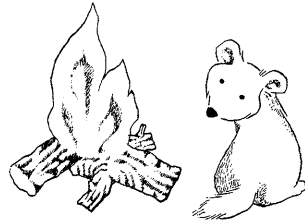
相変わらず、Qくんはお弁当を食べなかった。先生は、ちよつと考えていた。「もしかしたら、食べ始めるきっかけを逸しているのかもしれない」。

六月の一番最初のお弁当の日の午前中、Qくんは砂場で大きな海をつくり、大きな山をつくり、トンネルもうまく開通し、水を流し込む水路も完成し大満足だった。先生は、「チャンスかもしれないな」と思った。そこで、Qくんにこう言った。「今日は、食べてみようか？ お弁当」

Qくんは、「いいです」と断った。そこで、先生は、「あのね。人間の体もね、ずっと使わない

と動かなくなっちゃうんだって。毎日動かし、いることが大切なんだって。無理しないでちよつとずつがいい（このとき先生は、捻挫した足のリハビリ中。もちろんQくんも

知っていた）んだって。幼稚園でお弁当食べるのも同じだと思ふんだ。久しぶりに食べてみようよ」と言ってみた。するとQくんは、「誰もいないところがいい」と言った。そこで、二人は幼稚園の中をいろいろ捜しまわった。Qくんは、「誰もいないところ」として、職員室の片隅のスペース（職員の着替えのためにカーテンで区切られているが、カーテンの外では教頭先生や事務の方がお弁当を食べているという状況）を選んだ。そし



て、Qくんは久しぶりにお弁当を少しだけ食べて帰った。

「誰もいないところでのお弁当タイム」三回目、お弁当を全部平らげたQくんは「フー！（やったぜ！）」と息を吐きながら誇らしげにカーテンを開けて出てきた。背中ごしにそれを聞いた先生は、お弁当を食べていたフリーの先生と思わず目を合わせてはほえんだ。そして、なんかちよっと嬉しくなった。

六月四回目のお弁当の日、先生は保育室にたたで囲った食事スペースをつくった。そしてQくんは、久しぶりに保育室でお弁当を食べた。五回目の日は、いつも遊んでいるPくんも一緒についたての中で食事をした。「ここいいなあ、ほくもここでたべたいなあ」「いいよ」というやりとりを、Qくんはとても喜んだ。その後Qくんは、いろんな子どもと「ついたての中の食事タイ

ム」をすごした。先生は、Qくんにとって「自分の居場所が目に見える形で確保されていること」はとても大きなことなのだと思うた。自分の居場所がちゃんとあつて、「だれかここにこないかなあ」と思っている自分がいて、「きてくれてよかった」と思える経験を重ねられたことが、Qくんの気持ちをゆつくりと満たしていくように思われた。

一学期最後のお弁当の日、Qくんはみんなと同じテーブルでお弁当を食べた。二学期どうなるかはわからない。でも、その日のQくんは、「こわい」と思う気持ちとまっすぐにつきあっているように見えた。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼稚園の中の未就園児クラス たんぽぽ組

大沢 啓子

幼稚園で遊ぶ未就園児

私の受け持ちのクラスは、東京都目黒区、私立駒場幼稚園の未就園児クラス、たんぽぽ組。幼稚園入園前の二歳をすぎた子が対象で、お母さんと一緒に遊んだり、お母さんから離れて保育者や友だちと遊ぶ、十人程の小さなクラスです。月曜から金曜の各曜日十名

（後期は十二名）の登録制で、朝九時十五分から十一時三十分までの二時間余り、室内や園庭で遊びます。

みんなそれぞれ思い思いに遊びますが、ホールや園庭で遊ぶ時は大人の目が行き届かず危険なこともありうるので、子どもたちがあまりちらばらないようにみんなをさそって遊ぶことを心がけています。

たんぽぽ組は様々な理由でこのクラスを必要として

いるお母さんと子どもたちで成り立っています。近所に同年代の子どもがいなくて遊び相手を求めて、また、子育てに悩み相談相手・話し相手を求めてくる若いお母さん。児童館など屋内施設と違って、外遊びもできる幼稚園の環境が魅力という人。学生ママやお母さん自身の勉強のため、数時間でも子どもを預かってほしい人。下の子が生まれてなかなか思うように相手をしてあげられなかったり、お産で孫を預かったおばあちゃんが一緒にきていたこともありました。また、言葉などの発達の遅れがあり親も子どもとくさんの人とふれあう必要のある人や、入園準備のため幼稚園の経験を少しさせたいと考えているお母さんもいるわけで、十人いれば全員それぞれに入会の理由が異なっているのです。

子どもたちは登園すると部屋一杯におもちゃを広げて思い思いの遊びをします。メンバーがそろって遊びが一段落つくと、場所を変えてみんなで外にでて遊び

ます。まだ一人遊びや大人との関係で遊んでいる子が殆どですが、幼いなりに遊びの世界が展開しています。子どもたちはお母さんや保育者と一緒にゆったりと安心した世界がもてるように、またお母さんには他の子との関係の中で自分の子の育ちを感じてほしいと思っています。幼稚園の中で落ちついて子どもとつきあっていると新しい発見がたくさんあるのです。

そして子どもたちが、幼稚園という場や私たち保育者に慣れ、お母さんがいなくても不安なくすごすことができるようになると、家事をしに家に帰ったり、病院や美容院など子連れでは行きにくい用事をすませてきたりなど、上手に自分の時間を作っているお母さんもいます。

たんぽぽ組の発足から現在まで

そもそもこのたんぽぽ組ができたきっかけは、あるお母さんの相談からでした。平成八年一月半ば、四月

から入園予定の子どもたちにむけて、三月までの約二か月間、幼稚園に慣れるため週に二回、慣らし保育のお誘いをしたところ、十数名の親子から希望の申し入れがありました。ところがその時に、その子たちといつも一緒に遊んでいた一学年下の子たちが、おいてきぼりにされた状態になってしまったのです。月齢ではそう違わないのに、学年が違うということで切り離されてしまったのです。困ったお母さんが園長先生に相談したところ、そういうことならとその子たちも一緒に遊びにくるようになりました。そのお母さんたちから話を聞くうち、実はお父さんが入院していて……という話などもでてきて、いろいろな事情で入園前から幼稚園を必要としている家庭がこの地域にもあるということがわかり、新年度から本格的に未就園児クラスを設けることになったのです。

平成八年度は五月から週二回、新しい子を交えての保育も始まり、六月からはスタッフも増員しすぐに週

四回にふえました。幼稚園側の設定した火・金曜日だけでは曜日の関係で来たくても来られない人がいたからです。木曜日は地域の児童館で幼児教室を開催しているため必要度は低いということで、とりあえず一学期は月・水曜日も開設すると評判は口コミで地域に広がり、二学期からは木曜日も始めることになりました。

平成九年度はまた様子が変わりました。幼稚園の在園児数が増え空き教室がなくなってしまったのです。急遽、職員室を移してそこをたんぽぽ組の保育室にあてました。前の年まで使っていた部屋の半分ほどの広さしかありません。その部屋で定員六名で始まったのですが、やはり希望者が増え二学期からは十名になりました。なかには二歳の誕生日を迎えたばかりの小さい子たちや、お母さんが勉強を始めたのでその時間を確保するために毎日くるという子もいて、狭い室内ではありましたが、それぞれ自分の世界を確保できる遊

びがくり広げられていました。

平成十年度になると仕事をもったお母さんが相談にみえました。〃今は休んでいるが、子どもが安心してすごせる場があれば預けて週に数回、短時間でも仕事を再開したい。将来は保育園ではなく幼稚園に行かせたいと思っている〃ということ、預かり保育との関係もあり、ますますたんぼ組の必要性が感じられる年となってきたのです。

そして四年目を迎えた今年の四月、平成十一年度前期（五～九月）の入会申込みを募集したところ、受付初日で殆どの曜日が定員の十名に達してしまうという事態になりました。これはどういうことなのだろうと私たちスタッフも驚いて申込書を見てみると初めての子が目立ちます。在園児・卒園児の弟妹はあまりいません。電車で二駅先の、乳幼児の預かりを専門としていたベビールームが閉鎖になったことと関係があったのかもしれない。

幼稚園の評判は口コミで地域のお母さんたちに広がり、見学に見える方がたえません。現在、定員がいっぱいになってしまったため空き待ちをしていただいています。いろいろな事情でたんぼ組を必要とされている方のためになるべくお断りしなくてもすむように努力をしてきたつもりですが、施設の問題、定員の問題は私もスタッフも頭がいたいところです。保育室の広さは限界なので設備を工夫したり、専用のブランダを増築する事になり、夏休みを利用して大工事が始まります。これで十月からの後期には保育スペースも少し広くなり定員も十二名に増やせます。この原稿を書いている時点では後期の申込み状況がどうなるかはまだわかりませんが、お断りはしないですんでほしいと願っています。

少子化といわれる



現在、幼稚園は選ぶ側から選ばれる側に変化しています。そして家庭にいる母子は悩みや希望を受けとめてくれる場所をさがしているのです。幼稚園が何をすべきかが求められているのです。

幼稚園の中のたんぼ組の位置

幼稚園の中に小さな子たちが遊びにきているということは、在園児にとっても大きな意味があります。在園児たちにとってたんぼ組は、幼稚園の中でも他のクラスとはちよつと違う特別区域に思われているようです。まずおもちゃが違います。パトカーや自動車・新幹線などミニカーがたくさんあります。そして部屋の半分は畳が敷いてあり冬には炬燵も用意されます。途中におやつもです。幼稚園というよりも家庭のようで、とてもくつろげる部屋になっているのです。時々自分のクラスで身のおき場のなくなった子の避難場所になることもあります。彼らには何か心がおち

つく部屋のようです。どの子も勝手気ままに振るまうようなことはありません。自分たちより小さい子の部屋なのでやさしい気持ちで接してくれるようです。年少組などは月齢ではそれ程違わないのですが、意識の中には大きな違いがあるようです。まして年中や年長組は余裕をもってこの小さい子たちを暖かく見守ってくれているのです。つまり、たんぼ組の存在は、そこにきている母と子を支えているだけでなく、幼稚園全体の子どものたちの成長をも支えていると考えられるのです。

子どもの発達と子育てを支える

長々とたんぼ組の現状を書きましたが、年々必要度の高まるこのクラスを、この先どう考えていったらよいのか悩むところです。幼稚園での子育て支援への行政の取り組みはまだまだのようで、実際、幼稚園の施設を使って保育園を始めたり、動きだした幼稚

園への補助金を予算化している自治体もありますが、地域の実態を把握していない自治体も多く、対応はばらばらです。

預かるばかりが支援ではないというご批判をいただいたこともありましたが、駒場幼稚園には親や地域の必要性や幼稚園の努力でここまで来たという実績があります。自分から仲間を作ったり行動を起こしたりできる人たちはまだいいのです。もともと単純に、迷い道に迷い込んで困り果てている母と子がたくさんいるのです。どうしてもなくなり何とかならないかと重い口をあけた若い母親たちの声は聞いてあげなくてはなりません。少子化の波の中で一緒に言葉を交わす仲間もなく、あふれる育児雑誌の情報に迷い、自分以外わが子を見守る大人のいない家庭状況の中で子育てに大きな責任と重圧を感じながら子どもと向かい合っている母親を支え、小さな声を拾っていく。そのことが幼い子どもたちの健全な成長をも支えていくこ

とになるのです。そんな役割は幼稚園だからこそできるのではないのでしょうか。施設の有効利用や、園児の確保という園側の都合だけでなく、子育て世代とこれからの子どもたちを支えるために、窓口を開いていたと思います。

しかし、このことは一幼稚園の努力で解決できるものではありません。うわさを聞いて遠くからわざわざ電車に乗ってくる親子もいるということは、近くに受け入れてくれる幼稚園がないということなのでしょう。ご近所の幼稚園がもつと自然に地域の子育てを受け入れるようになれば、一か所に集中することもなくなるでしょう。そのためには現状のように一部の幼稚園の努力に頼るばかりでなく、自治体も実態をよく把握し、みんなで子育てに取り組んでいきたいものです。

(駒場幼稚園)

☆ 九月号六頁上段十五行目の「決定」は「決実」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

編集後記

今月号から、金田利子先生に「子育て支援」について六回にわたって書いていただきます。「支援」とはいえ、単に親が楽になればいいのではないのです。歴史的な展望にたつて、また、現場の事例を通して、これからの「支援の方向」をご一緒に考えてみたいと思います。

*

夏のある日、ある幼稚園の砂場で遊んでいる子どもを見ていました。

その日の遊びは黙々と展開しました。年長の三人の女の子が砂場のなかに入り、緑のコンクリートを前に並んでしゃがみました。その緑に、赤いフライパン、ピンクのボール、

白いお碗をのせ、それからの三人はひたすら手を動かし続けました。

容器に砂を入れる、ジョウロで水を注ぐ、多すぎた水を器を傾けて流す、スプーンで混ぜる、そこに砂を入れる。この一連の動作を何度も何度も繰り返していました。気がつくとも二十分程が過ぎていました。

そこへ遅れて登園してきたKが声をかけました。その会話から、三人が食べ物や食器に盛り付けようとしていたことがわかりました。乾いた砂が自分の気に入った湿り具合になるまで水と砂を交互に入れて試行錯誤を繰り返していたのでした。

その湿り具合には微妙な好みの違いがあるようです。自分にぴったりのそれを求め一人で黙々と繰り返すその姿に、砂場の遊びにはこんな展開もあるのだと思いました。(A)

幼児の教育

第九十八巻 第十一号

(一九九九年十一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年十一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四—九

〒〇三—五三九五—六六一三(営業)

〒〇三—五三九五—六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇—二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレイ

ベル館にお願いします。

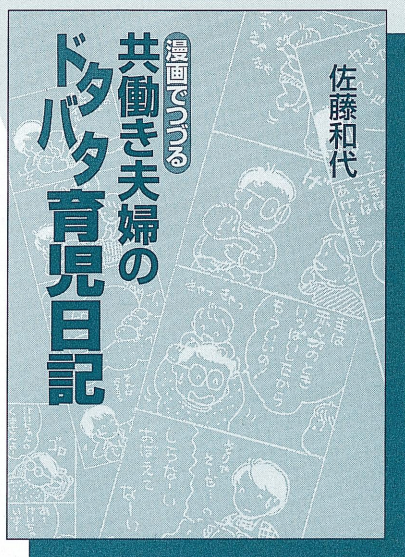
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

漫画でつづる

好評
発売中

共働き夫婦の ドタバタ育児日記

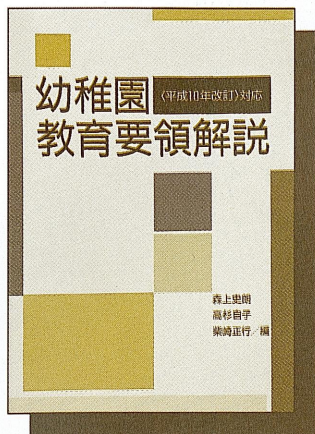
個人的な育児にまつわるできごとが、子育て奮闘中のお母さん方の笑いと共感をよぶのびのび育児日記。保育者にも、育児中の母親がどんなことに喜び、不安を感じるのかがわかり、母親対応のコツがつかめる本として活用できます。



佐藤和代 著

B6変型判 208頁 定価：本体1,200円＋税

キンダーブックの
フレール館



平成10年改訂対応

幼稚園 教育要領解説

付録 平成10年改訂・幼稚園教育要領全文

平成10年に改訂され、来年度(12年)より実施される新「幼稚園教育要領」をより深く理解するための、教育要領解説書の決定版！第一線の研究者・保育者が結集し、理論・実践の両面から、新教育要領を総合的に解説します。

【主な内容】

- 第一章 幼稚園教育要領はどのように変わってきたか
—元年から10年までの子どもを取り巻く環境の変化と、改訂までの概略—
- 第二章 幼稚園教育の考え方の基本
—平成元年教育要領の基本を解説—
- 第三章 幼稚園教育の充実と発展(10年改訂のポイント)
—元年教育要領との相違点を詳しく解説し、新教育要領がめざすものを、くっきりと浮かび上がらせてます—
- 第四章 幼稚園教育要領の内容
—教育要領の組立て、子どもの生活と遊び、各領域の意味と相互関係について、詳しく解説します—
- 第五章 幼稚園教育を計画し実践するために
—指導計画作成のための考え方の基本を詳説します—
- 第六章 教師の役割
—10年改訂で強調された“教師の役割”のポイントについて詳説します—
- 第七章 幼稚園運営の弾力化
—これからの幼稚園運営の方向を明らかにします—

好評
発売中

森上史朗 高杉自子 柴崎正行／編著

A5判・並製・カバー付・288頁・定価：本体1,600円＋税

キンダーブックの
フレール館